

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成十七年五月一日発行(毎月一回一日発行)
第十二卷第一号(通巻第一三三号)

鈴



ぐるっけ

創刊11周年

第133号

5. 2005

俳句雑誌

GLOCKE

庭
桜

品川鈴子

庭桜見に出づ稿に躓つまずきて

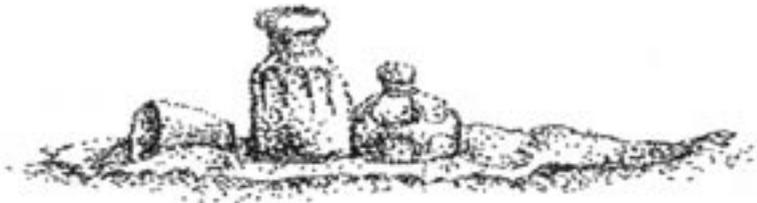
淡々と駆込み寺の紅枝垂

紅枝垂撫でられて散るきつかけに

雨風の花片ちりばめ書斎窓



夫の忌に垣を繕ふボンド以て
フルートを復習^さひて棚の藤揺るる
列をなす背丈ちぐはぐ入学式
空海の潜みし窟に鈴うらら
締切り稿送る遍路の道すがら
帰り行く鶴がひと声づつ残し



玉 鈴

兵庫 史 あかり

レシートに膨らむ財布着ぶくれて
門扉凍て深夜の帰宅拒みをり
白帯に黒帯眩し寒稽古
園児らの節分鬼と仲直り
女帝在りし藤原京趾草萌ゆる

愛媛 星加 克己

補聴器の電池とぎれし寒夜かな
消えし人雪に足跡点々と
老いの歯によるしき固さ粳^{もち}う餅
雪女とろりくくと溪に消ゆ
荒獅子の凍野を叩く山太鼓

香川 細川 知子

こめかみへ流るる泪春の星
初閻魔地獄の絵図もおがみけり
童心と無心でたぐる風の糸
春服の珍しがらる淡き色
蝉丸の面に穴なく冴返る

吟

兵庫 細野 恵久

山藤の目立たず山に溶け込まず
鍋に合ふまで筍の先を刎ね
乾電池より液滲みみる薄暑
ほととぎす啼くや弔辞のふと途切れ
走り梅雨翁の旅出の日と聞くも

香川 松井 洋子

大特価と書かれし仔犬歳の市
善男善女も欲あれば熊手買ふ
初風呂や全裸構はず挨拶す
まず右の大地起こすや鋤始
番犬も寝過ごしている女正月

愛媛 松本 恒子

共に来て離ればなれに海苔を掻く
花菜和え男料理の一メニユー
買って出た鬼が泣き出す追儼豆
不動明王の掴みし滝水柱
濡れ帰るブーメランには片時雨

愛媛 三浦如水

涸滝に来て滝壺に降りてみる
回はずにガタゴト走る木の実独楽
霊峰が雪を冠りて威を増せり
障子窓ありし昔の小学校
探梅行よくころぶ人又転ぶ

愛媛 三浦澄江

寒垢離の鋼はがねの水が女体打つ
連れ添ひて六十年や実南天
長老と云はれて籠こもる春炬燵
卒業式体育教師の薄化粧

兵庫 三枝邦光

浮灯台ともす由良の門春一番
天神のみくじ中吉春の風
水軍の裔住む外浦春一番
春の風岩肌青き先師句碑
春一番岬に小さき遊女塚

兵庫 水野範子

凍蝶の最期の息を葉に載せて
雪しまきぬつくと立ちし疫病神
寒に逝く幼眼の塵舐めし人
縁石を車乗り越え今朝の雪
看護士の惚けししぐさ春隣り

香川 三橋早苗

足早に道路横切るうかれ猫
用無くもふらり立ち寄る雛の店
春立つや一畳分の伸びをする
甲子園決まる球児に春一番
願ひごといつも変はらず雛飾る

和歌山 宮原利代

掛軸の墨痕清し冬座敷
墓万基世界遺産の雪高野
一直線青灯凍てる滑走路
犬が守る戸板に張らる猪の皮
仲買女指せわし立て鯛を糶る

薬草歳時記

(一三三) ツバナ(茅花)・チガヤ(茅萱・白茅)

市橋章子

まながひに青空落つる茅花かな

芝 不器男

チガヤはイネ科の多年草。各地の日当たりのよい原野、海辺の砂地、路傍など、どこにでも叢生しています。チガヤの若い花穂をツバナ(茅花)と呼びます。

牧野富太郎博士の説によると、チガヤとは「チなるカヤ」。チは漢字の千つまり数が多いことで、数多く群生するカヤだということです。

春先、地際から葉をつきだすようにして生えてきますが、葉よりも前に、鞘に包まれて槍の先のような花穂が、密生して伸びてきます。やがてほぐれて、絹のような白毛の密生した穂になり、夏になると穂絮を風に飛ばします。草丈をさらに伸ばし、晩秋には草紅葉となつて燃え立ちます。

地上部が枯れた頃、根茎を堀上げ、日干しにしたものを生薬名「茅根」とよび、消炎、利尿などの目的で処方用いられています。

民間療法では、身体のむくみに一日量約十グラムを煎じ

て用います。

茅花の穂蛭の血止めに今もすや

細見 綾子

花穂を噛むとほの甘いのは、蔗糖が含まれているから。子供の頃の懐かしい遊びの味です。花穂で覆つて小さな傷の血止めにするのも、遊びの中で教えられたもの。

六月晦日の名越なごしの祓はら。各地の神社にチガヤを光輪の形に作つた「茅の輪」が設けられ、くぐるくぐると病疫を免れるといわれており、善男善女が神妙な顔でくぐります。

古来、詩歌・文学にもたびたび登場。『万葉集』にはチガヤを詠んだ歌が二十六首もあります。面白いことに、『万葉集』『古今和歌集』『後撰和歌集』などには、叙景や恋歌に使われていますが、『源氏物語』以後は、淋しい荒蕪こうの場所、廃屋・廃園の象徴として用いられることが多いようです。

昔はこの草を刈りとり、むしろのように編んで「苦くま」をつくり、舟や小屋の雨よけ屋根としたものです。

見渡せば花も紅葉もなかりけり

浦の苫屋の秋の夕暮れ

藤原 定家

参考文献 「大歳時記」

講談社

「身近な薬効植物」

実業之日本社

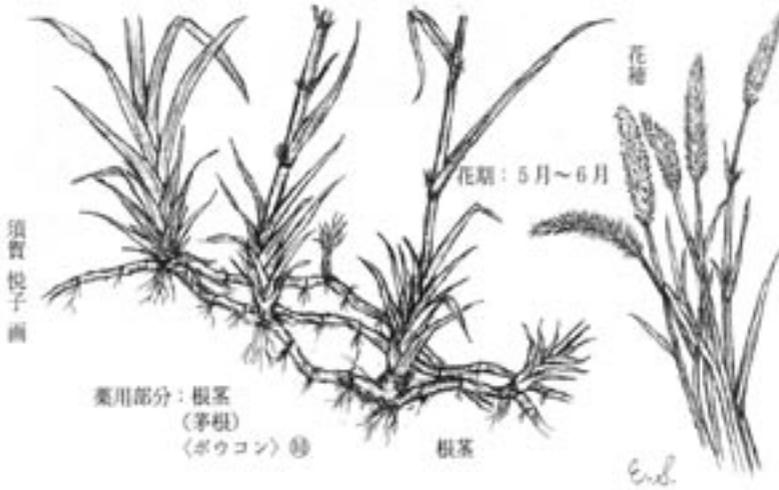
著者略歴

神戸薬科大学卒

チガヤ (チ、フシゲチガヤ) (チガヤ属) (いね科)

Imperata cylindrica (L.) P.Beauv.var.

Koenigii (Retz.) Durand et Schinz (= *I.cylindrica* (L.) P.Beauv.)



真茅葺くこの世の家は仮の宿	されど媾曳茅萱の紅も失せ果て、	すずすごと日の入る山の茅萱かな	此里は染めて一面茅の葉かな	つばな笛父の嘆きは音とならず	地の果のごとき空港茅花照る	足裏も明るさうなる茅花道	屋上の茅花ほほけて吹きなびき	狂ひても女茅花を髪に挿し	三日月のほのかに白し茅花の穂
沢木 欣一	中村草田男	佐藤 紅緑	松瀬 青々	上田五千石	横山 白虹	永田 耕衣	加藤 楸邨	三橋 鷹女	正岡 子規

鈴の奏

品川鈴子選

厄おとす炎井桁の芯に立つ 愛媛 田口たつお

袴のすこし着くづれ鬼やらひ

指先にシクと応へし薄氷

薄氷の割れ筋どれも直線に

忍術の如き校庭雪しまき 岡山 岡 敏恵

独り居て声優となり豆を撒く

日脚伸ぶ縁の雀も長居せり

春隣犬小屋ごとんと伸びをする

雪舟の絵画の真偽冬霞 兵庫 中川美代子

少年に元気をもらふ雪礫

縄跳びの縄が巻き込む冬銀河

急ぎ逝くバレンタイン日忘れ得ず

失せし物探しあぐねて雪催ひ 兵庫 山口 庸子

着ぐれておしやべりしてるガードマン

着ぐれて達磨となりしやんちゃの児

縫物はおざなりとなり針供養

由良岳の軟々水とて寒造 兵庫 吉本 昭子

元伊勢の礎を汚せし雪椿

女正月妻に一ト日の旅許す

下戸の吾も飲める新酒の「京女」

梅一枝光る病窓生氣満つ 兵庫 水野 弘

山の宿水車の軋む音の冴ゆ

寒もどりワインの城も人まばら

サツカーの声援に湧く街灯り

日記買ふ店長ひとりの店じまひ 兵庫 村田とくみ

筆圧の自ずと強き帳始め

成人式祖母に教はる裾捌き

農具小屋錠前を替へ鍬はじめ

数多ある癖の一つに懐手 愛媛 伊藤 康子

無性にも母に会ひたき四温晴

冬籠り頭の体操怠らず

騙すのも騙さるるも嫌冬さるる

寒暁に向い巡拝バスは発つ 愛媛 大西ユリ子

巡拝の寺の手洗い大つらら

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川鈴子 評

四句〜十五句 細川知子 "

* 選句は全て 品川鈴子

袴のすこし着くづれ鬼やらひ 田口たつお

上下調った衣服は平安の頃から用いたが、主として江戸時代の武士の礼装を袴と書き、同じ染色の肩衣と袴とを小袖の上に着る。普段から和装離れの当世では、折角年男に選ばれても身にそぐわず、晴れ舞台で豆を撒くうちに、どこか着付けが乱れてくる。

独り居て声優となり豆を撒く 岡 敏恵

独住いでの豆まきは、自分の声を嫌でも意識せざるを得ない。私などはいつも気恥かしくて、なるべく小声で済ませる。ところが震災の年だけは例外。避難してきた寄合い家族に演劇青年がいて、朗々と元気な声で鬼を追った。この句も名優の素質は充分。

縄跳びの縄が巻き込む冬銀河 中川美代子

縄飛びは激しい運動だから、全身が温まるので冬の季語。

日の短い折から遊び飽きず、益々佳境のままにとつぷり暮れた。闇に横たわる冬銀河へとどく程豪快な縄が、銀河を巻き込んで遂に躓くまで、お開きとはならない遊び仲間。

失せし物探しあぐねて雪催ひ 山口 庸子

探し物は見付かりましたか？
散々探しあぐねた挙句仕方なく諦めたものの、暫くして再度探してみると、絶対に探して無かつたはずの場所や目の前にあつたりする。

失せものを探す時の有効な呪文ですが、空海の「音羽の水の清水の結ぶ心の涼しがるらん」を北の方角に向かつて三度唱えると見付かること請け合いです。是非お試しあれ。
下戸の吾も飲める新酒の「京女」 吉本 昭子

「京女」なんと魅力的な京都らしいネーミングなのでしよう。京女の魅力を称えたはんなりとした新酒の喉越に、下戸を自認していた作者も思わず杯を手に舌鼓。酒器にもこ

だわって京焼か備前かそれとも李朝か。

さぞ夜更けまで御家族との談笑も弾んだことでしょう。

梅一枝光る病窓生氣満つ

水野 弘

「梅一枝」に病窓からも手の届くようにすつくと伸びた梅の枝の生命力、そして続く五感の全てが動きだした「光る」「生氣」「満つ」と生き生きとした三つの言葉に命の大切さが力強く表現されている。病は医者や薬よりもご本人の氣力が一番の治癒に繋がる。

春の瑞々しい自然の氣の恵みを受け、すっかり病も癒え退院の日も間近い。

成人式祖母に教はる裾捌き

村田とくみ

日頃ほとんどジーンズですからね。着慣れない着物は帯の息苦しさをも凌ぐ、裾が縫れて歩き難い事はこの上なし。そこへ出番到来、孫娘さんに着物のお見立ての助言は勿論、裾裁きのことも事細やかに指南。正に長老の面目躍如。成人式へ向う颯爽とした晴れ姿を一家総動員で見送る幸せな家庭の様子が伺えます。

数多ある癖の一つに懐手

伊藤 康子

本来の懐手は着物を着た時に快や胸元に手を入れる仕草だが、ふと姿勢も悪く懐手をしている自分に気付き、思わず背筋を正されたことでしょう。

無くて七癖有って四十八癖と言われるが、癖毛、足癖、女癖などと癖というものはとかくあまり感心される比喩にされない。それに自分の癖は自分で気付くことは少ない。

寒暁に向い巡拝バスは発つ

大西ユリ子

この日のために何日も前から体調を整え早起きし、巡拝バスも黄金色に光り輝きながら暁に向かって出発。一年中で最も美しく澄み切った寒の頃の暁の様子を鮮やかに表現。さぞ巡拝の功德があったことと思われませう。

四国八十八ヶ所巡礼の回数を示す納札の色は、白一〜三回・緑四回・赤八回・銀二十五回・金五十回・錦は百回以上とのことです。

片脚を隠す白鷺冬の川

山口 博通

姫路城は白鷺城と称され、他にも白鷺は美しいものに譬えられる。山腹の林のコロニーから滑空して冬の川原に降り、嘴を首に埋め片脚を下腹に隠し、独りぼっちで餌を待っているとも眠っているかにも見える。風に吹かれ片脚を上げた孤独な白鷺の姿は、冬の川の風物詩でもある。